＜書　評＞

A. Kertesz（著）

横山　巖　神奈川県総合リハビリテーションセンター　七沢病院長　（監訳）

河内十郎　東京大学教養学部助教授

失語症と関連障害

—基礎・数量分類・病巣局在・回復過程—

笹沼澄子　横浜国立大学　東京都老人総合研究所

原著者のDr. Andrew Kertesz とは，1980年 Cape Cod で開催された Academy of Aphasia でお目にかかったことがある．いかにも研究者タイプの温厚な人柄をしのばせるこの若手神経科医は，ボストン学派の流れを汲む失語症学者として——とりわけ失語症の数量分類に関する勝れた業績により——一段と光っているように見受けられた．

今回，日本語訳が完成された「失語症と関連障害」は，著者が10年余にわたり，500名を越える失語症者を対象として蓄積した臨床・研究の集大成ともいえるものである．その目標とするところは，著者自身のこうした経験を従来の文献による知見で補いながら，①失語症に関して現在わかっている情報を新しい視点に立って総括し，かつ②新たなアプローチと技法を用いて得られた新知見を提示する．という二重の目的を果たす教科書を書きあげることであった．このような目的は見事に達成されたといってよかろう．

総計16章から成る本書の中味は，大まかに4つの領域に分けられる．その第1は，著者の最も得意とする数量分類学の技法を駆使して行われた失語症状の定量的評価と分類の客観化に関する領域（第1章～第7章）であり，本書の最大の特色をなしている．従来の分類法および検査法の概観に続いて．Western Aphasia Battery（WAB）の開発の経緯，特徴（第3章，第4章），WABを基礎とした数量分類学による失語症者のクラスター化の手続きと結果が詳細に述べられている（第5章～第7章）．こうした数量分類学の技法による客観的分類の結果，伝導失語が明らかに2つのグループに分かれることは，この症候群に関する近年の論議と関連して興味深い．また．この方法を用いて急性期と慢性期にかけての失語症状の継時的変容を新たな視点でとらえなおしている点も示唆に富む．

第2の領域は，脳損傷の局在定位に関するもので（第8章～第10章），従来の伝統的方法による局在定位（第8章）に加えて，アイソトープスキャン（第9章），CTスキャン（第10章）の技法により得られた知見がまとめられてある．

第3の領域は，いわゆる純粋症状としての失読（第11章），失書，失算，ゲルストマン症候群（第12章），失行症（第13章），失語と知能（第14章）の問題が手ぎわよく整理されている．

第4の領域は失語症の回復と訓練（第15章）および関連障害の回復（第16章）にあてられており，回復に影響を与える諸因子の検討，言語訓練の方法と効果，非言語機能（視空間機能，行為，読み，書字など）の回復などが検討されている．

また．巻末に，原著にはないWABのテスト内容が附されており，第1の領域（特に第3章～第7章）の理解を助けている．行き届いた配慮といえよう．

訳出にあたられた七沢病院の横山巖院長，河内十郎氏，言語科の竹内愛子科長ならびに言語治療士の方々は，我が国における失語症の臨床・研究に数々の貢献をされてきたチームであり，筆者にとっての長年の師であり同僚たちでもある．訳の的確さもさることながら，読者の理解を助けるために必要に応じて原著に加筆されるなど適切な配慮がなされている．

本書が，失語症および関連領域の臨床・研究を志す学徒にとって格好の教科書としての役割を果たすことが期待される．

（B5，頁276，図90・写真12，1982．¥7,200，〒300，医学書院 刊）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/17 13:06:53